

ただ一人の教育学者に「生き方」を訊く

科学史を背景とする教育学

教育学はその手法や着想の多くを隣接する人文社会科学に負っている。たとえば、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけての「学び」ブームを牽引した佐伯胖や佐藤学においてはそれぞれ心理学やアメリカ哲学（デューイの民主主義的教育思想・プラグマティズムの思想）が背景にあった。

戦後の教育学者において一人、科学史を背景に自身の教育学を打ち立てた人物がいた。それが板倉聖宣であった。彼は自身のバックボーンである科学史研究から感得された科学の成立条件、科学者のある種の態度を習得させるための教育手法を生み出す。これが「仮説実験授業」である。ここではその授業スタイルには言及を行わず、むしろ、彼が感得した科学の成立条件、科学者のある種の態度について彼の講演から検討したい。

文部省と組合の対立

板倉の講演と座談会での発言を読み解くためには日本の教育学における近現代の史的状況について

の認識を共有しないといけない。

G H Qの初期に方針に従い、戦後日本の民主化のため労働組合が設立されていった。これは教育界も同様で、いわゆる「日教組」（日本教職員組合）が誕生した。G H Qの政策転換によつてこの日教組は為政者にとっては「望まれぬ子」になってしまった。組合の共産主義への接近は自由主義陣営に入つた日本政府を悩ませた。文部省と日教組の対立は激しさを増し、昭和の教育史に混乱と不条理を生み出していく。

このような歴史的背景の中ではすべての理屈は簡素化される。文部省―日教組という敵対関係がある中で、敵の言っていることはすべて間違いか、私たちを貶めようという悪魔のささやきなのである。考えることなど無意味である。すべては定式化された論理の中で白黒がつく。官僚や教師のほとんどがこのような枠組みに入っていた……と言えるかは分からない。とはいえ、時代の趨勢を握っていたのは純化された思考であつた。そのような枠組みが提示されていた時代、日教組を援助していたのは教育学者たちであつた。

二項対立から逃れるため

板倉はこのような枠組みを越えていこうとした教育学者であつた。板倉の講演において名指しされ

る「教育科学研究会」は東大の教育学者らの活躍の場であり、組合＝実践者と学者を結びつける場でもあった。既に東大の教育学者が組合の精神的支柱であったことは指摘されている。板倉の立場は明確であり、文部省―日教組の二元論から離れて事の正否を吟味しようというものであった。現代においては科学的態度として擁護されるべきものである。

先取ってしまった板倉の主張は思考停止から逃れて、自ら事の正否を考えるといるものであり、シンプルなものである。しかし、それは単純であると同時に非常に難しいものである。その難渋さは結局、科学が確立されると同時に愚弄されてきた、「歴史」の中に見いだされるのである。

仮説とは何か、科学とは何か

講演の冒頭、板倉は「仮説」とは何かという五十年前の自身の論考を提示する。「仮説とは何か」というその論考は「仮説」の辞書的意味から始まり、仮説が仮説たる、つまり科学という営みの中心に位置することのできる条件を探っていく。実験結果と整合性がとれず、のらりくらりとしながら、いつまでたつても棄却されないものは仮説ではない。さらに繰り返し再現されることを前提にしたものではないと仮説ではない。

この原則を提示するために板倉が用いるのは科学史上、そして、教育研究上、仮説を愚弄してきた人々の挿話である。科学が成立するための条件から抜け出てしまった似非科学や素朴な教育研究への批判がこの論考では示唆されている。同時に科学者と教育研究者を併置することで両者の同一性を、つまり、教育学者は科学者たるべきであるという見識を暗示する。

実際にテキストが読み上げられた後、先述の教育科学会を名指しして、自分たちを科学者であるという自覚のない教育学者に対して「僕だけが教育学者なんだよ」と述べている。「ただ一人の教育学者」板倉が問う「仮説とは何か」とは「科学とは何か」という問いなのである。

フリーメイソンとジェンナー

科学が成立するための態度と条件について講演の後半で板倉はフリーメイソンとジェンナー、そして、丸沢常哉の話をもとに議論をする。フリーメイソンの挿話が示すことはキリスト教絶対主義のもとで科学が発展したヨーロッパで、この秘密結社が実は宗教裁判的弾圧から科学者を守るために機能していたのではないかという仮説である。実際にこの仮説は二〇一五年二月より始まった『たのしい授業』での連載で徐々に明らかにされていっている。

ジェンナーの挿話は少し複雑な内容を持っている。フリーメイソンのメンバーであったジェンナー

はカッコーの托卵の研究で有名になった人物である。板倉は道德物語の中で動物を擬人化するやり方とジェンナーの現象を忠実に記録することを対比させている。前者にキリスト教的道德を見いだす板倉はジェンナーの研究がキリスト教絶対主義の時代において不道德なこととして弾圧の対象になり得たことを暗示している。

現象を忠実に記録するジェンナーの姿は彼の大きな業績である牛痘の接種においても示される。板倉はジェンナーが牛痘接種の価値を「牛痘の有効性を発見したこと」ではなく、「民間伝承として伝わっていたそのことを確かめたこと」にあるという。つまり、一つの仮説を検証し、そこで得られた事実を、現象を忠実に記録したことに価値を見いだすのである。

科学が持つ、権威への無頓着さ

板倉はジェンナーの挿話にもう一つの意義を持たせている。ジェンナーが医学博士号に対して頓着しなかったこと、その一方で周囲の医学者たちがジェンナーを医学博士にしたがったこと、この対比が意味するもの。それはジェンナーの権威に対する無頓着さであり、押し並べて考えるなら、現象に対して、つまり、真理に対して忠実である以外に科学者である条件はないということであろう。ジェンナーは医学博士ではなかったが十分に科学者であったのであるから。彼が希求していたのは真理で

あり權威ではなかったのである。

キリスト教絶対主義や医学会という權威に対して科学は無關係に存在する。それは真理そのものを希求するがゆえに宗教的世俗的權威とは本来、自由でないといけないのである。

これらの指摘は抑圧と解放の關係において抑圧者の側に科学との接点がないことを示している。

板倉は同様のことが被抑圧者との間にもいえることを述べている。それが丸沢常哉の挿話である。丸沢らは大正デモクラシーの時代風潮の中で民衆立研究所を設立する。埼玉の農家が水銀を銀にできたといつて研究を持ち込んだ。丸沢はそれを信じて検証するが結局は捏造であることが發覺する。板倉は、「民衆が考えたことは嘘ではあるまい」と考えたのだろうと推察する。被抑圧者である民衆のいうだから、真理であるというふうに見えることはできない。ただただ、現象そのものを記述することではか真理は確かめられない、科学は成立しえないのである。

「正義」と「真理」

板倉の議論は余りにも当たり前のことを言っているようにも思えるだろう。しかし、科学史上あまにも多くの不誠実さが散見していたし、捏造研究は現在でも騒動を起こしている。

板倉は「正義が怖い」という。正義と真理を混同すること、それを多くの科学者は行ってきた。

私たちが社会という人々の相互作用の中で様々なしがらみの中で、権力関係の中で、生きている以上、「真理」は、個人や集団の信念である「正義」によってねじ曲げられる可能性を持つのである^二。

のりくらりとする仮説とはこのような状況をいうのであろう。事実に即しない真理は姿を変えて棄却されずに、その根本は変わらず居すわり続ける。これが「のりくらりとした仮説」、仮説ならざる仮説である。

板倉は講演の最後に自身の著作『模倣の時代』で示した、森鷗外が行った歴史的失敗を引用している。脚気の原因を米食ではないと現象に反して主張した軍医であった森鷗外は結果的に多くの軍人を死に至らしめた。この背景には——本講演でもたびたび言及される——優等生的気質が隠されていたと板倉はある論考で記している。当時、ビタミン概念が西洋医学において発見されていなかったため、西洋医学を模倣する優等生であった森鷗外は経験的に確認されていた米飯をやめて麦飯を食べるという改善策を信じられなかったのである。曰く「西洋伝来の既存の医学のみを信じて、日本の現場の軍医たちが長い間に確認してきた圧倒的な事実を重視しえなかったのは、なんとしても模倣のみを事とする優等生のあわれな敗北としかいいようがないであろう」^三。

^二板倉（一九九六）『近現代史の考え方——正義ではなく真理を教えるために』仮説社

^三板倉（一九九七）「陸軍脚気大量発生事件」一九九頁、科学朝日編『スキヤンダルの科学史』朝日新

板倉のいう「正義」とはある事実らしい言明を現実に確かめずに信じ込むことで生み出される。事実らしい言明の模倣と、事実そのもの、真理そのものを希求することは実は違うことである。それが混同されるのは明らかに「優等生」なる人々を作り出すシステムであり、結局は「教育」というものなのかもしれない。だからこそ、板倉は科学の成立を教育に託すのであろう。

科学者としての生き方

板倉の議論は今、自身が他者の前で何を話し行為すべきかという問題と結びつく。板倉の挿話はそれぞれ時代も文化も異なるものの、同じ科学者という肩書きのもとで生きていた人々の行為と決断を表すものである。

自分の仮説が事実と異なるとき、のらりくらりと逃げるのか、潔く棄却するのか。教科書で習ったことをそれが事実と異なっても正しいと言いつけるのか。権威との関係で、民衆との関係で正義を選ぶのか、事実そのものとの関係で真理を選ぶのか。

科学者とは特定のプログラムを順々に繰り返す実験人形ではない。自分が正しいと思ったことを社

会の中で言明する一人の人である。行為と決断を伴う、この歴史を生きる一人の人である。権威や民衆との関係の中で、つまり、抑圧者と被抑圧者との関係の中で自分が真理だと確かめたことを述べる人である。その関係性の中で語られる真理はときにどちらかに都合の悪いものかもしれない。それは誰かにとって不正義かもしれない。しかし、事実在即しているなら、それは真理なのである。

そのような生き方、世界と他者とそして自分自身への対する態度そのものが、科学者を科学者たらしめるのである。だからこそ、板倉は座談会の終わりをこう締めくくる。

「誰が敵か味方が分からなくなっちゃう連中がいるんだ。……そういう生き方をちゃんとこうやって貫徹したかということが気になっている」。

「そういう生き方」が板倉自身の生き方であるなら、彼が文部省——日教組の二項対立に縛られず、正しいものを正しいと言いつづけたことを指すだろう。それは事実そのものに即した真理を希求する態度であり、若い頃に身につけた価値観から生まれる正義を擁護する気持ち、とは違うものである。

倫理への昇華

「生き方を貫徹できたか」。自分自身を省察し、自分の足跡を吟味する。このことをフランスの歴史学者ミシェル・フーコーは「倫理の実践」と呼んだ。フーコーにおいては倫理に対峙されるのがコー

ド化された道徳、つまり聖典化された行動原理、教科書に載っている正しさを身につけることとしての「道徳」であった^四。

フーコー的な倫理―道徳の対置から考えれば板倉の生き方への問いは倫理的なものであることが分かる。「仮説とは何か」という問いは「科学とは何か」という問いに転換する。そして、その問いはまた「科学者とは何か」、「科学的生とは何か」へと変容し、最終的には次のような問いになるだろう。

――「私は今、真理を希求しているのか。真理と思い、そう言及した事柄は事実そのものに即した真理であったのか、社会のしがらみの中で誰かにとっての正義を真理ととり違っていないかったか」

――「今、私は私が望んだように生きているだろうか。事実そのものに即した真理を希求していた私は本当にそのように真理と関係を結べただろうか」

四詳しくはフーコー、ミシェル（一九八六）『快樂の活用』田村俣、新潮社